

義あることと思います。施設の建設期、拡張期では、まさにリング、ビームライン、実験装置の建設や、共同利用実験推進・支援がスタッフの仕事であるとする考え方が支配的でした。一方、スタッフももっと「サイエンス」をやるべきだという議論もある段階からよく聞かれるようになりました。また、スタッフは装置開発や方法論の開発など、一般ユーザーとは少し異なったスタンスでの研究を進めるべきである、との意見も聞かれます。放射光研究施設のような加速器やビームラインなどの大型の施設・装置を擁する共同利用研究機関では、インスツルメンテーションや方法論開発は特に重要と言えます。いずれにしても、どの意見も個別に聞けば正しい意見ですが、スタッフ個人のレベルにおいて全てを同時に高いレベルでこなすことはそれほど容易ではないと思われます。放射光研究施設という組織としては、すべてにおいて高いレベルの活動を目指すべきと思いますが、個々のスタッフは現在よりももうすこしスペシャリティーを発揮するあるいはアクティビティーが外から見える工夫を行うことが、施設全体のアクティビティーの向上につながるようにも思えます。法人化、任期制の導入や人事交流の促進の議論とも関係している議論だと思いますが、20周年のこの機会にスタッフおよびユーザーコミュニティの方々と一緒に考えてみたいと思います。

PF 放射光発生 20 周年記念行事の報告

放射光源研究系主幹 小林正典

3月18日(月)9時に運転を終了した午後、「フォトン・ファクトリーにおける放射光発生20周年記念」行事が行われた。行事は記念式典と記念講演会とに分かれ、式典に先立ってPF-AR放射光北西棟の現地見学、講演会に引き続いて記念懇親会が開かれた。プログラム内容はPF News Vol.19, No.4 February 2002の最初に挟み込みで記載がある。参加者は100名弱で、20年前に活躍された懐かしい方々が多数出席された。

3号館セミナーホールで開かれた式典では、菅原機構長、木村物質構造科学研究所長の挨拶に引き続いて、太田放射光学会会長、雨宮PF懇談会会長から祝辞が述べられた。また、PF創設当時の高エネ



菅原寛孝機構長の挨拶



式典で挨拶をする木村嘉孝物質構造科学研究所長

ルギー物理学研究所長であった西川先生、分子研 UVSOR からの祝電が披露された。その後、松下放射光研究施設長から1982年3月に2.5GeV電子ビームがリングを周回し加速にも成功し、*virgin light* が観測されたことなどの当時の話を交えながら施設報告があった。

コーヒーブレイクの後、記念講演会が開かれた。「PF創設の頃を振り返って」と題して高良初代施設長が講演をされた。続いて「PFにおける膜蛋白質複合体、ウィルスの構造研究」と題して月原阪大蛋白質研教授、「物質科学と放射光」と題して壽榮松高輝度光科学センター部門長、「化学と放射光」と題して小杉分子研放射光施設長、「フォトン・ファクトリーへの期待」と題して上坪高輝度光科学センター副会長から講演がなされた。

記念懇親会は職員会館1階のレストランで開かれ、20年前の思い出話や苦労話に盛り上がった。しかし、PFスタッフはもとより現役の若手研究者がも

っと参加して、当時のご苦労話の中から計画を立てるコツを聞き出して、自分たちの新計画推進に役立てるという気構えがあっても良かったのではと云う印象であった。当時は「光源がない」状況で新光源を創りあげただけに熱気は当時のほうがはるかに強かった。それだけに現 PF の運転性能に加え PF-AR の高度化改造を済ませたという状況の中で、PF の将来計画を練り上げ推進することには当時とは異なる困難が予想される。PF 設立当時のプロセスを学び直し、当時の方々の熱気を別の形で補いながら、利用研究の新展開への夢と加速器性能の開発を統合して、今後の計画推進の助けとしたい。歴史は、フォトン・ファクトリー計画（仮称）が創られ議論を公にするようになってから PF 建設開始まで 10 年を要したことを示している。



高良和武名誉教授（初代施設長）による記念講演「PF 創設の頃を振り返って」



懇親会の様子

PF 懇談会新会長挨拶

平成 14、15 年度 PF 懇談会会長に就任して

PF 懇談会会長 佐々木 聡（東工大・応セ研）

このたび、はからずも PF 懇談会会長という大役に選出され、2 年間にわたって任につくことになりました。微力ですが、PF ユーザーと PF 施設側との橋渡しに努めたいと思っています。よろしくお願い致します。

最近の情勢を鑑みて、最初に取り組みなければならないのは、10～20 年先を見越した将来計画立案へのサポートだと思われます。独法化をはじめとする不確定要素がぞくぞくと押し掛けてきています。その中で若さや活性を保ち続けるためには、スタッフにとってもユーザーにとっても、託すことができるような大きな夢をもつことです。幸いなことに、3 月 18～20 日に開催されました放射光発生 20 周年記念講演会や第 19 回 PF シンポジウムでは、「将来の光源」について活発な議論が行われました。また、PF 直線部増強や AR 増強をはじめとするここ数年の計画については、議論が充分煮詰まっていると感じました。サイエンスの面でも、ここ数年は SPring-8 や他の放射光施設と充分共存できると思われれます。

10 年先を見越した将来計画に対して PF 懇談会に求められていることは、どんなサイエンスをどんな形で展開していくかについての方向性を見出すお手伝いをする事です。PF 懇談会の目的の 1 つに、「PF の将来計画の立案とその推進」（第 3 条の 4）があります。将来計画を進める上での問題提起・提案に対し、PF とユーザーとの掛け橋となり、PF コミュニティとしての総意をまとめることが必要でしょう。将来計画を重視する新体制としては、将来を託せる若手や中堅に利用幹事をお願いすると共に、人数も 3 名に増強しました。利用幹事が対応できる分野についても、光源から VUV・X 線実験までを網羅できる陣容で、将来計画を支援しやすくしました。

第 4 世代の加速器として、リニアック型、リング型、あるいはその折衷型などが議論されていますが、第 3.5 世代リングも含めて、その中のどれを選択す